神様のゲームに巻き込まれたんですけど…

ナガレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様のゲームに巻き込まれたんですけど…

【Ｎコード】
Ｎ４２３６ＢＡ

【作者名】
ナガレ

【あらすじ】
俺こと月城命（つきしろみこと）は神様に選ばれた。神様の暇潰しのゲームに強制参加ってなんだそれ？勝てたら願いを叶えてもらえるらしいからまぁ頑張ってみようかな。
注：作者は特に何も考えずにやってます。不定期かつミス、誤字脱字があっても温かく見守ってくれれば幸いです。

序章「はじまりはじまり」

目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。
とりあえず起き上がり辺りを見回すと床も壁も天井すらも真っ白な異様な空間だということがわかった。
「ここどこだ？部屋で寝た覚えはあるんだけど…」
真っ白な空間…か。よく読むなんかだと二次創作だとここで神様とか出てきて転生とかトリップものが始まるんだけどな…
「その通りだ」
「うわっ」
つい数秒前まで誰もいないハズだった目の前に一人の男が立っていた。
「おっと、驚かせてしまったかな？」
「いきなり目の前に人が出てきたら誰でも驚くって！」
「ふむ。そういえば前にも同じことを言われたことがあったな。次は気をつけることにしよう」
…こいつ、絶対に反省してないな。
「まぁ、そんなことはどうでもいい。それよりこれから君には遊戯王の世界に行ってもらう」
「え？強制的に決定？選べたりとかは？」
「ないな」
マジかよ…なのはとか東方の方がよかったな。
「先に言っておくが君を殺した、正確に言えば死ねせたのは私だが手違いやミスではない」
「珍しいパターンだな。もしかして俺は選ばれしものとか…」
「厨二乙」
…俺もそう思ったけど人に言われるとキツイなぁ。というか神様も俗世間に染まるものなんだな。
「選ばれたのは事実だがランダムに選んだ結果がお前というだけだ」

「うーん、俺が選ばれたことは分かったけど何で選んだかってのと何をすればいいのかを教えてもらってもいいか？」
「理解が早くて助かる。まずは選んだ理由だが、神というものはほぼ永遠の命を持っているのだ。私も他の神も何千年と生きてきている」
「まぁそうだろうな」
「よって退屈なのだ」
「チョットマテ」
「そこで他の神と相談してゲームをすることにしたのだ」
「待てっつってんだろ！」
「なんだ、まだ話の途中だ。静かに聞いていろ」
「それはあれか？俺はあんた達の暇潰しに殺されたっていうのか？」
「その通りだ」
「ふざけるな！人の命をなんだと思ってるんだ！」
「私に文句を言われても困るのだがな。元々これを望んだのは君自身なのだから」
「え？」
「私が選んだ条件は３つ。遊戯王を知っている。世界移動に耐えられる魂の強さ。そして異世界を望む、つまり元の世界から逃げ出したいと思っている人物。君にも心当たりがあるのではないかね？」
「……」
ある。
「そういうわけだ。話を続けさせてもらう。二つ目の答えだが君にはさきほど伝えたゲームに参加してもらう。君の勝利条件は最難関だ。最終決戦、遊城十代対ダークネス戦で遊城十代に勝利させること」
「それの何が難しいんだ？十代は勝つだろう？」
「それは何も干渉しない場合の話だ。君の他にもイレギュラーが参加した場合結果はわからない。遊城十代が負けることもあればそこにたどり着くとことすらできない可能性もある」

「それが他のやつの勝利条件になってるってことか？」
「いるかもしれないというレベルの話だ。他の勝利条件は知らされていない。知りたければ直接聞き出すのだな」
「ルールはこんなところだ。勝者はたった一人、君の勝利条件は難易度が高い、よって満たせば何人がクリアしていようと君の勝ちとなる」
　シンプルだ。しかしそれゆえ難しい。ルールや原作の流れのことを考えていると神は手をポンとひとつ打った。
「おっと、忘れていた。勝った暁にはどんな願いも一つ叶えられる。君の願いは何かな？」
「……」
「まぁ今はいいだろう。終わるその時までに決めておくことだな」
「さぁ、それではゲームスタートだ。精々私たちを楽しませてくれたまえ！」
　神がそういうと突然強い光が視界を遮り、徐々に意識が闇に閉ざされていった。

「変な夢…」
　起きて最初にしたのはそんなことを呟くことだった。ぐるっと周りを見回すと本棚、机、パソコンやテレビ等どこをどう見ても自分の部屋そのものだ。
「ゲームのしすぎだな…」
　しばらく真面目に勉強でもしようかな…と考えながらカーテンを開けるとそこから見えた光景に俺は目を疑った。そこにはデュエルディスクでデュエルをしている人とそこに集まっていた観客。そして現在のＳＯ〇Ｙですら再現できないバーチャルリアリティ、暗黒のドラゴンと二頭を持つキングレックスと思われる２体のモンスターが戦っている非現実的なものだった。
「マジか？マジなのか？」
　しばらく現実逃避をした後ふと机の方をみると先程は気付かなか

ったが机の横にカバンが置いてあることに気づいた。丁度海馬社長が持っていたようなアタッシュケースに妙に達筆な字で「神より」と書いた手紙が貼り付けてあった。手紙を読んでみると長々と書いてあったが要約すると次の通りである。

・俺の持っていたカードは一部を除き持ってきている。
・原作効果があるカードは持っている枚数分作成した。
・シンクロやエクシーズを使っても良い。
・全ては自己責任ということを忘れてはいけない

ということと生活に関わる必須事項（主に戸籍や金銭に関すること）やこの時代の禁止制限リストなどが書いてあった。
「なるほどね。っていうか禁止制限ゆるすぎだろ」
無条件のバーンやモンスター破壊が禁止、一部のカードが数枚制限になっているくらいで『苦渋の選択』や『八咫烏』などの壊れカードが無制限という某ＱＢ風に「わけがわからないよ」と言ってしまうレベルだ。これは自制したほうがいいのかな？
とりあえず普段使う遊び心満載のデッキと対イレギュラー用のガチデッキでも作ってＧＸ介入を始めよう。

序章「はじまりはじまり」（後書き）

どうもはじめまして、ナガレと言います。色々なところで二次創作を読んでいたら自分も書いてみたくなったのでやってしまいました。今回は普通に説明回ですね。次回からはデュエルするはずです。これから宜しく御願います。

第1話「実は十代って最下位じゃないんだぜ？」（前書き）

命「今日の最強カードは『ガオドレイクのタテガミ』だ。自分フィールド上に表側表示で存在する「ナチュル」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力はエンドフェイズ時まで３０００になり、
効果は無効化になる通常魔法だ。ガオドレイクさん馬鹿にする奴は地獄に落ちればいいのに」

第1話「実は十代って最下位じゃないんだぜ？」

そんなこんなで試験当日。

いやーデッキ作るのに1週間もかかるとは思わなかった。とりあえずシンクロとエクシーズは無しでって考えて作ると難しいものだね。漫画版E・HEROにしようと思ったけどいろんなところで使い古されてるし独自の構成にできないからパス、甲虫装機（インゼクター）はガチすぎてドン引きだし、サイキック族がまだ存在してないし、ワンキル特化（ソリティア）はつまらないし、ロックやバーンは嫌われるしで相当迷ったよ。ガチデッキの方は前の世界で自分が使ってたのに各種制限緩和したカードを突っ込んだだけだから楽だったんだけどね。

「次、試験番号63番。前に出なさい」

お？やっと出番か、呼ばれたから行こう。ん？試験番号が微妙だって？そりゃそうだよ。問題の難易度が鬼だったからね。例えばこんな感じ。

問　『青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）』の攻撃力、守備力を答えよ。

って定番っぽい問題から

問　『魔人ダーク・ヴァルター』の融合素材を答えよ。

覚えてねーよそんなんって言いたくなるのとか

問　相手フィールド上に『岩石の巨兵』が存在し自分フィールド上に『ブリザード・ドラゴン』が存在するとき『ブリザード・ドラゴン』に『突進』を使い、その後『バースト・ブレス』を発動した場合どうなるか答えよ。

なんて調整中って答えるしかない問題があったからしょうがないと思うんだ。ぶっちゃけ『バースト・ブレス』を使わずに殴れって話なんだけどね。

閑話休題（それはさておき）

「試験番号63番だね、えっと名前は？」

「月城命（つきしろみこと）です。よろしくお願いします！」

「うん、よろしく。では早速だが始めよう」
「「決闘（デュエル）！！」」
命　ライフ４０００
手札５
試験官　ライフ４０００
手札５
「私の先攻。ドロー！」
ちょ、遊戯王名物「言ったもの勝ち先攻決め」ですか！？
「私は『マンジュ・ゴッド』を召喚！」
マンジュ・ゴッド　ＡＴＫ１４００　ＤＥＦ１０００
「そしてマンジュ・ゴッドの効果発動！デッキから『エンド・オブ・ザ・ワールド』を手札に加える！」
おま、デミスとかふざけるなコラ。
「更にリバースカードを１枚セットしてターンエンドだ！」
試験官　ライフ４０００
手札５
フィールド
マンジュ・ゴッド　ＡＴＫ１４００
リバース１枚

「俺のターン、ドロー！」
うん、手札はそこそこいい。けどデミス相手で勝てるかっていったら微妙な感じだな。ま、やってみればわかるか。
「手札の『ナチュル・ガーディアン』を墓地へ送り『ワン・フォー・ワン』を発動！」
「ワン・フォー・ワン？聞いたことのないカードだな？」
「ワン・フォー・ワンの効果でデッキから『ナチュル・モスキート』を特殊召喚！更に手札から『ナチュル・ビーンズ』を召喚！」

ナチュル・モスキート　ＡＴＫ２００　ＤＥＦ３００
ナチュル・ビーンズ　ＡＴＫ１００　ＤＥＦ１２００
「そんなカードを並べても私のマンジュ・ゴッドの攻撃力には届かないぞ？」
「届かないからいいんですよ。ナチュル・ビーンズでマンジュ・ゴッドに攻撃！」
「そんなことをしても何の意味もないぞ」
「ナチュル・ビーンズの効果発動！１ターンに１度戦闘では破壊されない！更にナチュル・モスキートの効果、『ナチュル』と名のついたモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは、代わりに相手が受ける！」
「なんだと！？」
試験官ライフ４０００→２７００
「リバースカードを２枚セット、ターンエンドだ！」
命ライフ４０００
手札１
フィールド
ナチュル・モスキート　ＤＥＦ３００
ナチュル・ビーンズ　ＡＴＫ１００
リバース２枚

「くっ、私のターン、ドロー！」
立ち上がりは上々ってところかな。ビーンズとワンフォーワンがあったから攻めれたけどここからどうしようかな、真っ向からビーンズを倒しに来てくれると楽でいいんだけど。
「手札から魔法（マジック）カードエンド・オブ・ザ・ワールドを発動！フィールドのマンジュ・ゴッドと手札の『ソニックバード』を生贄に『終焉の王デミス』を儀式召喚！」
終焉の王デミス　ＡＴＫ２４００　ＤＥＦ２０００
ですよねー。出たな、デミス。能力値自体は上級モンスターの基

準程度しかないけどあいつの本当に恐ろしい所は…
「デミスの効果発動！ライフを２０００支払いフィールド上のデミス以外のカードをすべて破壊する！」
試験官ライフ２７００→７００
「破壊された『黄金の邪神像』の効果発動！邪神トークンを１体特殊召喚する！」
邪神トークン　ＡＴＫ１０００　ＤＥＦ１０００
「それじゃこっちも、破壊された『荒野の大竜巻』の効果発動！セットされたこのカードが破壊された時フィールド上の表側表示カードを１枚破壊する！俺はデミスを破壊する！」
「なに！？」
　危ないところだった。ドロー出来てなかったら厳しい状況になってたかもね。ちなみにもう１枚のセットカードは『聖なるバリア－ミラーフォース』だった。さすが発動しないことに定評のあるカードだ。ミラーフォースェ。
「まだだ！魔法（マジック）カード『高等儀式術』発動！デッキから『ガーゴイル・パワード』と『首なし騎士』を墓地に送り『破滅の女神ルイン』を特殊召喚！」
　え？
破滅の女神ルイン　ＡＴＫ２３００　ＤＥＦ２０００
「ルインと邪神トークンでダイレクトアタック！」
「くぅっ」
命ライフ４０００→７００
「これでターンエンドだ」
試験官ライフ７００
手札１
フィールド
破滅の女神ルイン　ＡＴＫ２３００
邪神トークン　ＡＴＫ１０００

マズイ、マズすぎる。手札は『ナチュル・エッグプラント』のみ。ナチュルの下級モンスターで攻撃力１７００以上のモンスターは２体のみ引けなきゃ負ける。ここで負ける二次小説なんて読んだことねーぞ。今だけ俺に宿れチートドロー！

「俺の…ターン！ドロー！」

恐る恐るカードを確認する。

緑。

…緑？魔法？あれ？負けた？肩を落としカードをよく見る。すると、

「あれ？勝った？」

「どうした、早く進めろ」

「あ、はい。俺はナチュル・エッグプラントを召喚！」

ナチュル・エッグプラント　ＡＴＫ１０００

「そのモンスターでは邪神トークンと相打ちにしかならないな。これで終わりか！」

「まだです！手札から『ガオドレイクのタテガミ』を発動！『ナチュル』と名のついたモンスターの効果を無効にし攻撃力を３０００にする！」

「攻撃力３０００だと！？」

ナチュル・エッグプラント　ＡＴＫ１０００→３０００

「これで終わりだ！エッグプラントでルインに攻撃！」

「ぐわぁぁぁっ！」

試験官ライフ７００→０

「これで試験は終了だ。結果は追って連絡するので今日のところは自由にするといい」

「ありがとうございました」

「まぁおそらく合格だろう。何しろ私に勝ったのだから」

「ずいぶん自信があるんですね」

「ココだけの話さっき使ったデッキは試験用のデッキではなく私の

デッキだったからな」
「はい？今なんと？」
「いや何少し間違えただけだ。気にするほどのことではないさ。はっはっは」
気にするわ、はっはっはじゃねーよ。《儀式天魔神》みたいな構成になってたじゃん。明らかにクロノスより強いだろコイツ。
ハァ、もう疲れた。十代のデュエル見たかったけどいいや帰って寝よう。

第１話「実は十代って最下位じゃないんだぜ？」（後書き）

はい、どうも。デュエルさせてみました。使用デッキは《ナチュル》相手は《儀式天魔神》です。正直あんまり満足していない出来です。バンブーシュートとか天魔神とか使いたかったんですけどライフ４０００とかあっという間ですね。ナチュルとか氷結界のＤＴのテーマデッキって面白いですよね。ただしブリュとトリシュ、てめーらはダメだ。次回は翔の誘拐事件の予定です。ではまた。

第2話「デュエリストってちょろいかも？」（前書き）

命「今回はデュエルなしだ。…ところで俺の口調とかがなんかぶれてる気するんだけど？」

それは作者も未だに迷っているからです。今回は翔誘拐にしようと思っていたのですが流石に無理があったので先送りです。

第2話「デュエリストってちょろいかも？」

デュエルアカデミアから試験結果が届いた。どうやら俺はオシリスレッドらしい。

…赤かぁ、あんまり好きな色じゃないな。まあ介入するには丁度いいのかもな。などと割とどうでもいいことを考えながらアカデミア行きの船に乗っていた俺はふと気づいた。

あれ？そういえば原作キャラとまだあってないな。俺って十代達と同学年なのかと地味に焦っていると後ろから声をかけられた。

「やあ、６３番君」

振り向くとラーイエローの制服に身を包んだ特に特徴もない男が立っていた。…三沢ってことはＧＸで正解ってことか。

「えーっと、君は？」

知っているがボロを出すわけにもいかないので少し白々しいが名前を尋ねる。

「俺は三沢大地。ラーイエローの主席だ」

「俺は月城命、よろしく」

「こちらこそ。ところで試験の時に君が使っていたカードについて少し話を聞いてもいいかな。色々調べてみたのだがデータがなかったのでな」

マズイな。よく考えるとＤＴ始動のナチュルなんてこの時代にあるわけないな。適当に流すか。

「知らないカードなんていくらでもあるだろう。あの今じゃ有名なブラックマジシャンガールだって決闘王（デュエルキング）の武藤遊戯が使うまでは全くの無名なカードだったんだし」

「ふむ、確かにそうだな」

お？通ったぞ。今度からこの言い訳をつかうとしよう。

「まあそれでもいいが、カードのことを教えてもらってもいいかな？参考にしたいのからな」

うん。面倒だからいやだ。と言いたいのだが流石にいきなり原作キャラに悪印象を与えるのもどうかと思うし、ここはあの手でいってみるか。
「知りたいことがあるのならデュエルで聞き出すんだな。それがデュエリストってものだろう？」
「ははは、確かにその通りだ」
若干挑発っぽくなったけどこれも通るんだな。…デュエリストって意外とちょろいのかも。あ、今は俺もデュエリストだったっけ。騙されないように気をつけようっと。
「じゃあ今からデュエルするか？」
だから面倒だって。こいつ相手じゃ微妙だけどライバル風味にいくか。
「いや、こんなところでやっても面白くはないだろう。お前とはもっと大きな舞台で戦いたいからな」
「ほぉ、ずいぶんと自信があるようだな」
何を言ってるんだこいつは？
「勝負事には必ず勝つつもりで挑んでるからな。負ける気で戦ったら勝てるものも勝てなくなるしな」
「メンタル面では付け入る隙はなさそうだな。面白いな、次の機会を楽しみにしているよ」
そう言い残して三沢は去っていった。…見送っておいてなんだが十代の居場所でも聞きだせばよかったかもしれないな。まあ十代とのフラグは寮に行ってからでもいいか。対十代用のデッキでも作って時間を潰そっと。

で、到着しました。…気持ちワル、船の上でカードなんて弄るもんじゃないな。歓迎会まで寝てよう。うん、それがベストのはず！

はい、見事に寝過ごしました。現在０時半です。寮の歓迎会すらぶっちぎって爆睡ってなんだよ。だれか起こしに来てくれてもいい

んじゃないのか？…腹減ったな、食料を探しに食堂まで行くか。そう思い、ドアを開けたら…
ガンッ！
「いってーーっ！」
「アニキ！」
テヘ、やっちゃった。ってふざけてる場合じゃないな。急いで謝らないと。
「悪い、大丈夫か？」
そう言い、手を差し出すと…
「ああ、こっちも前見てなかったしな」
遊城十代（しゅじんこう）じゃないか。神様、ありがとう。こんなつまらないミスをした俺にもう一度チャンスをくれるなんて最高じゃないか！（あのいけ好かない奴は除く）
「ならよかった。えっと、俺は命。月城命だ。お前らは？」
「オレは遊城十代。んで、こっちが…」
「丸藤翔っす。よろしくっす、月城君」
「命でいいよ。俺も名前で呼ぶから」
そうして雑談をしていると十代が
「そうだ、命。オレとデュエルしようぜ！」
なんというデュエル脳。けどここは受けるしかないだろう。しかし…
「いいんだが、お前らは寝なくていいのか？もう1時すぎてるんだけど」
「へ？もうそんな時間なのか！？」
「ヤバイっすよアニキ！」
俺は眠くないから黙ってそのままデュエルしたほうが個人的にはおもしろかったんだが、流石に初日から寝坊で遅刻とか可哀想すぎるからな。
「ほら、慌てるくらいならもう寝ろ。デュエルならまた明日してやるからさ」

「絶対だぞ？じゃあおやすみー！」
「あー！アニキ待ってー！」
そう叫びながら十代たちは走り去っていった。…時間考えろよお前ら、迷惑だろ。さて、もう一眠り、も厳しいな。全ＨＥＲＯ突っ込んだバベルデッキでも作って遊ぼうかな。

翌日、入学式やガイダンスを適当に聞き流していよいよ放課後になった。
「命、約束通りデュエルしようぜ！」
「わかったわかった。ちょっと落ち着け」
どんだけデュエルしたいんだこいつは。まあいいや、今回は何のデッキにしようかなっと。昨日作ったバベルでも、ってあれよく考えるとネオスとかＤ－ＨＥＲＯとか入ってるからこの世界じゃ使えないじゃん。何のために凡骨ＨＥＲＯ崩して作ったのかよくわからんな。じゃ今回はこいつでいくか。
「よし。準備ＯＫだ」
少し離れたところでウズウズしていた十代に声を掛けデュエルディスクを構える。
「へへ、じゃあいくぜ」
「「決闘（デュエル）！！」」

第2話「デュエリストってちょろいかも？」（後書き）

ということでＶＳ十代です。一応流れと結末は考えてあるので次は明日までにできると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4236ba/

神様のゲームに巻き込まれたんですけど…

2012年1月14日11時54分発行